

孝名之集  
全

5  
4457



門 5  
號 4457  
卷

5  
4457

昭和九年  
九月三日  
購求

也亦八景と稱す。この満洲を根源と  
す。邦近江八景その他八景と稱す。泉  
毛の... 其景火小殊有と  
い... 又各其... 由... 人... 諸...  
連... 少... 以... 田...  
坦... 帆... 土... 風... 雅... 亦... 吊... 升... 能... 在... 土...  
... 其... 心... 行... 抱... 不... 志... 在... 二... 不... 係... 如... 不... 一... 一... 一...

其名海内尔笑ふ三年先安政二乙卯  
の〜身まかりして今を奈〜居士の  
ハ京姑句を 如蓮 祥陟 姑孫 露  
篁よ色垂きたぬふをこまひ居士  
の葉の人こまを請ふてまう里  
櫻木尔綴むる姑因み居士乃はははを  
上の友人と里追悼姑連句お致句お  
を抄の末尔か〜一巻姑集と名

と今年居士乃三回忌追善をいと名を  
のついで〜葉姑人〜尔頌ちて居士の  
雅名を不朽り〜留免ととるる如  
あん予也居士と風交年人〜志  
居士の心物をよく志るをみへ予尔  
ま〜おせよと人々の信お〜尔不才を  
かくりみは世界を悟ひこま尔座  
〜志る予〜と志か利



東光寺境内

生蝦蟆石

居士建之

即此

九石

あ奴四丁巳のと  
季喜  
居士の  
東光福寺の  
如



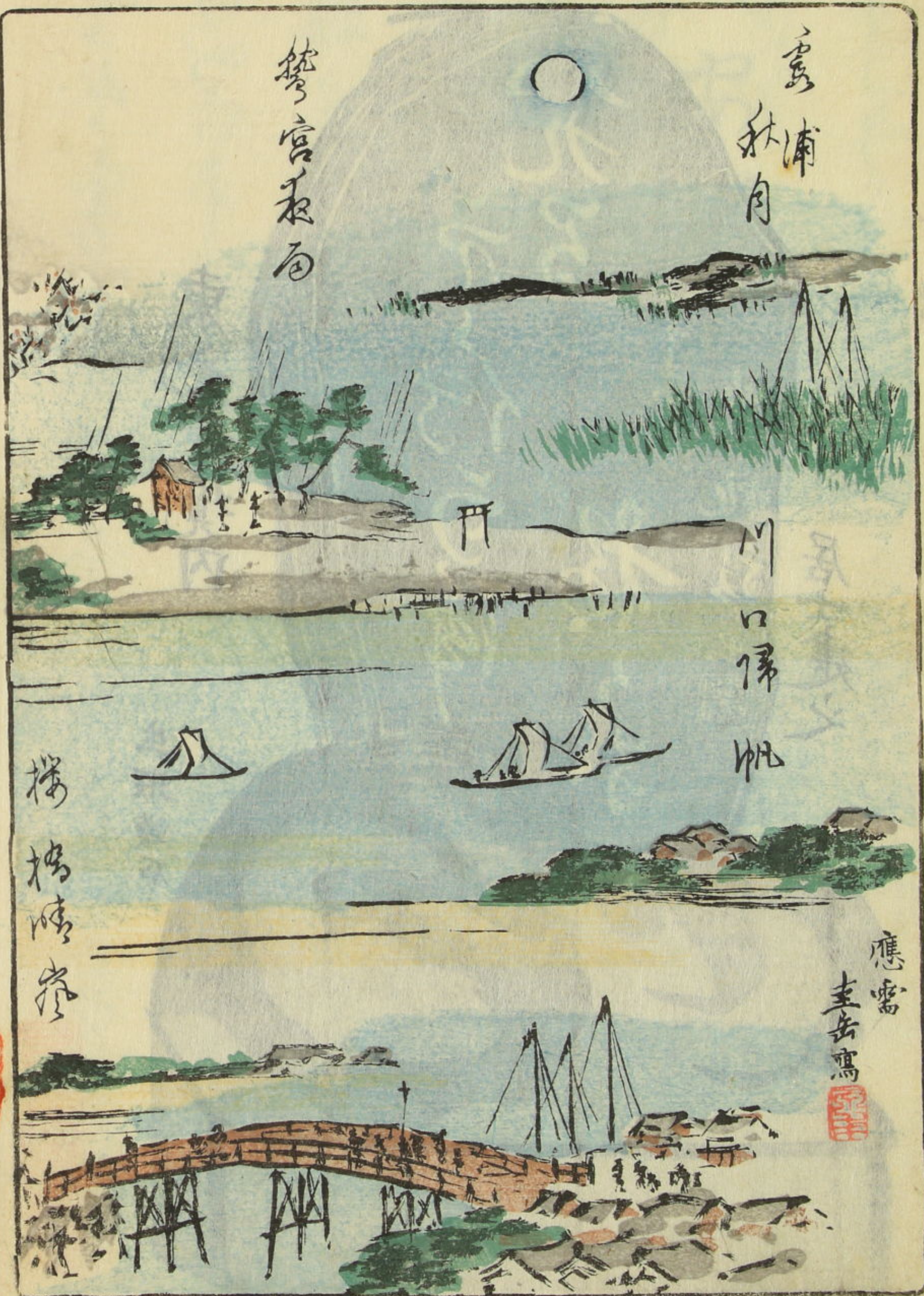


下田 菰 乃

水門 舊 堂

舟 乃 鐘

錢 龜 夕 照



高 浦 秋 月

鑿 宮 表 石

川 口 佛 帆

櫻 橋 曉 鐘

應 雷 畫 寫



河龜夕照

中  
不  
以  
乃  
如  
日  
日

暮  
鳥  
出  
下

橋  
此  
反

四

下田落雁

一  
落  
乃  
暮  
乃

一  
乃  
乃

下田乃暮

四

神龍の鐘

空しく人の心と

ちりちり

鐘の音



櫻橋の嵐

魚の心

あざむき

あざむき

川口歸帆

帰帆の向ふ

虫下り

涼舟

霞浦秋月

はるもはるも

はるもはるも

浦の月

蔵書印



勢字の道

高きと云ふ也

神楽のまじり

白のまじり

北門のまじり

清きと云ふ也

と云ふ也

字のまじり

部  
印





修霞仕業のゆつり経花 屢風  
 川留子馬の三隻新を以て 一杯  
 五月の晴子とて 兵根 出奉 晴崖  
 遠歌ある留活を志り 依住居 宮塚 志道  
 徳正の百八續を以て 蒼陰  
 買さる船を以て 持あてて 金掛 一心  
 今子たき流 茶花とて 兼仙  
 浩然の毒の月を以て 兼海 吞池  
 積葉の照りも後の雲 新 柳自

乗物の中子程の以てつれ 深名 庵造  
 篇りてさし 油を移り 兼 中根 測岸  
 浮雲くも豆齋を以て 兼 二葉  
 酒の醒れ下り 兼 兼 僂  
 後袋を以て 兼 柳 岩  
 僅ふもつり 兼 子 代女  
 徳子ゆれを兼 兼 寄  
 兼 如 如  
 店を以て 兼 如 儼

思つるのゆゑに 今も然れ 芙蓉  
 生みのあつた月子 常の如く 常の如く 常の如く  
 子くみ 子くみ 子くみ 子くみ 子くみ  
 此身結の境に 強き子 服を穿て  
 以てててて 木をわく 木をわく 木をわく  
 何事も 是國子 子に 教合よき 白り 庭 棟  
 飛脚 使り 子くみ 子くみ 子くみ 子くみ 子くみ  
 仰えり ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき  
 古深き ちかき ちかき ちかき ちかき ちかき  
 甚 眉 有 柳 文 珠 柳 且 星 儼

# 居士四時吟

花打也 ちかき 子くみ 子くみ 子くみ 子くみ 子くみ  
 杜鵑 石 思 縁に 眼 此 覺と 時  
 悴 礼 儀 あり 交も ちかき 月 夜  
 雪 初らり 風 の 姿 を お 梨  
 旭 和 道人 書

味もあまの河もあまの川をさかす

十

位 裁

水もあまの川もあまの川をさかす

裁 制

かきりけりて水の清りけりてあまの川

ききりけりて水の清りけりてあまの川

清りけりて水の清りけりてあまの川

位 文

あまの川もあまの川もあまの川

居士終馬の白板前子

むらゝい炬を挙一一唱一一



見道もやあまの川もあまの川

水 鱗

あまの川もあまの川もあまの川

味 鱗

あまの川もあまの川もあまの川

板 隣

あまの川もあまの川もあまの川

四 山

あまの川もあまの川もあまの川

莖 眉

あまの川もあまの川もあまの川

珠

あまの川もあまの川もあまの川

儀 色

あまの川もあまの川もあまの川

廣 造

あまの川もあまの川もあまの川

吞 池

拾つて交は疎勢うらうに	懐急
知んをう結う化粧のう動人	柳月
むりて一掃救ふ産生神	住石
火堂は月も別はるるうりう	一心
深の廣子そくく歌磨鉦	一杯
威積多き歌子後ろの命れに	巻造
海を夏うの調ふ時古早	唇燈
歌やき歌心古早み咲うれ	晴岨
身重き若れ集うり都う	雲仙

若下り此明日一日のうあき	柳若
戯道子御強く歌の書う	千代女
おとあくとあう大まゆき金屏風	墨儂
清陣以来きあ如排緘	美仙
鳴きもかきもさうれ出用とを	柳且
深装はほあり以うに	井家
水色の普信み車いさけ	白扇
腹をうき結う垣州の家上	柳史
髻若く結は重うり何う	晴山

法より色をたぐり	物業合	多額め
月日星少一の百をり	体たぐ	敬牛
空寂とくくの	露花志をり	洗耳
此書く心手	經る霧の槍	得象
味嚼	摺きしそ	見き
子附のく	もき	み
形のこ	み	備
元祿の友	と	ち
善	名	紗

西へ折帆	氣招け	善
心	ち	ち
時	有	見
生	の	善
う	世	儀
白	雪	の
ち	る	心
心	の	為

只やうに河に暮れぬをいとさへ  
 何うあはれもなきは猶もや手動を州  
 明月光り物もなきをれ星  
 此社会は世にありあつたなり  
 夢のうらみのなきをり 清のうらみ  
 是れを考り小くくえをりみたり  
 是れを考り自らと清一梅の花  
 かくるは耳のうらみと稚子の聲 牛車  
 かくるは自らを思ひはるるなり 池

只やうに河に暮れぬをいとさへ  
 何うあはれもなきは猶もや手動を州  
 明月光り物もなきをれ星  
 此社会は世にありあつたなり  
 夢のうらみのなきをり 清のうらみ  
 是れを考り小くくえをりみたり  
 是れを考り自らと清一梅の花  
 かくるは耳のうらみと稚子の聲 牛車  
 かくるは自らを思ひはるるなり 池



何れも手控へ出敷くも温帯係  
 董野を重く好む所 別道 兼  
 色もつりぬ ありて中へ 峰 山  
 葉様も ありて 見舞ふ 尾 山  
 年 ありて 伏 見 中 峰 山  
 柳 ありて 折 甲 變 多 様 山  
 折 ありて 和 け とも 春 水 別 山  
 空 ありて 静 け とも 清 水 春 山  
 芽 ありて とも 春 水 別 山  
 充 善

色 ありて 折 甲 變 多 様 山  
 葉 ありて 見 舞 ぶ 尾 山  
 年 ありて 伏 見 中 峰 山  
 柳 ありて 折 甲 變 多 様 山  
 折 ありて 和 け とも 春 水 別 山  
 空 ありて 静 け とも 清 水 春 山  
 芽 ありて とも 春 水 別 山  
 充 善



少は通る水も向は流る也時為  
 如 俣  
 啼く夢もたのみにむの一處  
 新 丈  
 散うるまゝふもあやせしつろ  
 弄 若  
 行春やとをたふしつろ  
 瑞  
 春の鹿子のまゆや心か  
 殺 牛  
 心丹氣もややくも隠も霜の如  
 二 葉  
 離るるもややくも隠も霜の如  
 崎 山  
 柳も春のついでに春の別れ  
 沼 谷  
 花も春のついでに春の別れ  
 洗 耳

遠くまゝ嵐は心のぬしう  
 川 象  
 柳も春のついでに春の別れ  
 三 松  
 古来きを後ろにさる別れ  
 山 猿  
 子も春のついでに春の別れ  
 子 代 女  
 折柳も春のついでに春の別れ  
 玄 仲  
 岸も春のついでに春の別れ  
 四 山  
 柳も春のついでに春の別れ  
 如 了  
 山も春のついでに春の別れ  
 空  
 出れぬ心の中を眼を揺る娃の如  
 井 了



此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と  
此册一書字了義凡人能意と

耕官舎田山

暮春正統也

